

【作物】

1 早期水稲の管理

- (1) 中干し：6月上旬頃(出穂35～40日前)から、必要茎数(約18～20本)/株が確保され次第、足跡が軽くなる程度に行います。中干しの目安は約7～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをしてください。
- (2) 追肥：根の活力を高めるため、出穂40日前頃にPKミックスを20kg/10a施用してください。

2 普通期水稲の管理

- (1) 品質向上対策
 - 登熟期(特に9月)に平均気温26～27℃以上の高温になると、腹白粒・乳白粒など白濁した玄米(白未熟粒)が発生して品質が低下します。対策として、田植時期は6月中旬以降として、無理な早植えは避け、株間22cm以上(45～50株/坪)の植付けとし、日当たり・風通しを良くしてください。
 - また、にこまるは、田植時期を6月1日～15日頃までとし、あまり遅植えにならないようにしてください。栽植密度は、過度の疎植にした場合に、青未熟粒の発生割合が多くなりますので50株/坪程度としてください。
 - さといも・やまのいも等野菜作付け後では、基肥量を減らしてください。
- (2) 病害虫防除
 - 「箱維新粒剤」を1箱当たり50g施用(移植当日)してください。
 - いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、イネツトムシ、ウンカ類、コブノメイガの総合防除剤です。
- (3) 水田雑草防除(除草剤散布)

農薬名	使用時期	使用量/10a	使用回数
エンベラージャンボ	移植直後～ビエ3葉期	25g/パック10個	1回
ジェイフレンドフロアブル	移植後5日～ビエ3葉期	500ml	1回
カチボン1粒剤51	移植時・移植直後～ビエ2.5葉期	1kg	1回
天空1粒剤	移植時・移植直後～ビエ3葉期	1kg	1回
クサトツタ粒剤	移植時・移植直後～ビエ2.5葉期	3kg	1回
ガンガン豆つぶ250	移植後3日～ビエ2.5葉期	250g	1回

【使用上の注意点】

- ア 高低差がないよう均平に耕起・代かきし、丁寧に畔塗りにして漏水防止に努めましょう。
- イ 除草剤散布後3～4日間はそのまま湛水を保ち、田面を露出させないようにしましょう。
- ウ 除草剤散布後7日間は落水、かけ流しはしないようにしてください(田面が露出し、入水が必要な場合はゆるやかに入水しましょう)。
- エ 藻類の発生が多い場合は、薬剤の拡散が妨げられるので、ジャンボ・フロアブル・豆つぶ剤は注意しましょう。

【野菜】

1 さといも

- (1) 疫病対策
 - ・梅雨期の防除を重点的に行ってください。
 - ・『25℃以上の平均気温と雨が伴う日』で広く初病し、被害が拡大します。
 - ・ペンコゼブ水和剤を予防散布し、初発確認後ダイナモ顆粒水和剤を散布します。

農薬名	散布濃度	収穫前日数/回数	使用上の注意
ペンコゼブ水和剤	500倍	収穫7日前まで/2回	予防散布により安定した効果がある。高温多湿時被害を生じるおそれがある。
ダイナモ顆粒水和剤	2,000倍	収穫21日前まで/3回	予防および治療効果がある。感染直後でも、病気の蔓延を阻止。連用すると耐性菌が発生しやすい。高温多湿時被害を生じるおそれがある。

注意点：被害防止のため、防除は灌水後夕方に行う。展着剤まくびか5,000～10,000倍を加用すると薬剤がよく付着し、防除効果が上がる。高温時には、10,000倍で使用する。

(2) 全期マルチ栽培

- ア 土入れ
 - 子芋、孫芋の肥大・品質向上『奥芽芋、たけのこ芋、青芋の発生抑制』とマルチによる葉焼け軽減ため、5月下旬～6月中旬頃に一輪管理機等でマルチ上に土をのせてください。

イ 害虫防除

ハダニの発生時は、サンマイトフロアブル1,000倍、またはコロマイト乳剤1,000倍で防除してください。

(3) マルチ栽培

- ア おおなか(化成体系)
 - 子茎の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安はマルチ栽培では5月下旬～6月上旬頃です。
- イ 追肥
 - 「MB粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(4) 露地栽培

- ア おおなか(長期緩効性肥料体系又は化成体系)
 - 子茎の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安は長期緩効性肥料体系又は化成体系で6月中～下旬頃です。
- イ 追肥
 - 長期緩効性肥料体系は「菌根甘」を40kg/10a又は化成体系は「MB粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(5) 害虫対策

コガネムシ類幼虫対策として、おおなか時に「オンコル粒剤5」を9kg/10a施用してください。ハダニ発生時には薬剤散布(全期マルチ栽培と同様)してください。

2 やまのいも

2本以上萌芽している株は、早いうちに1本にします。また、株もとに光が当たるように誘引し、蔓がむらなく繁茂するように蔓直しをしてください。

3 排水対策

例年、6月中旬頃から梅雨を迎えます。溝に雨水が溜まらないよう、排水を徹底してください。 <可部>

【果樹】

1 温州みかん

着果量に応じた管理を行い、果実の肥大促進と次年産用結果母枝の確保により、高品質果実の安定生産に努めてください。

(1) 着果量が少ない樹

養分競合による生理落果を抑制するために、着果部周辺の強い新梢の芽欠きや被さり枝の除去を行い、幼果とその周辺の受光環境を向上させてください。粗摘果は中止して、仕上げ摘果や樹上選果で着果量を調整します。

(2) 着果過多の樹

早期の摘果で夏芽の発生を促し、樹勢維持と次年産用の結果母枝の確保を図り、隔年結果の防止に努めてください。

- ・早期(一次落果終了後の6月下旬頃)に樹冠上部1/3を全摘果。
- ・速やかに夏肥施用(窒素成分量5kg程度/10a)。
- ・発生した夏芽はミカンハモグリガの防除。

2 中晩相類

(1) 摘果

中晩柑類の大玉果生産には、肥大が旺盛な生育初期の摘果が効果的なことから、着果が多い樹から摘果を開始します。

着果が多い樹は、一次落果終了後から摘果を始め、粗摘果は概ね60葉に1果残す程度とし、葉数が5～7枚の有葉果を主体に着果させます。また不知火は、7月上旬までに全摘果量の8割程度を目標に摘果します。

(2) 施肥(夏肥)、灌水

新梢の充実、幼果の肥大促進と樹勢維持を図るために、夏肥を施用します。(伊予柑・甘平・不知火等は6月下旬に窒素成分9kg/10a、愛媛果試第28号は6月上旬に窒素成分8kg/10a) 土壌が乾燥する場合は、灌水を実施し、肥料の吸収を促してください。

3 病害虫防除

- かいよう病と黒点病の感染に注意し、薬剤散布を徹底してください。
- カイガラムシ、カミキリムシ、ハダニ・サビダニも防除してください。
- かいよう病：6月下旬～7月上旬。ICボルドー66D200倍(高温時散布は薬害を生じることがある。夏季マシン油散布14日前までに散布)
- 黒点病：落弁後の第1回散布後、200～250mmの累積降雨または30日以内に2回目散布。ペンコゼブ水和剤600倍。 <可部>

【花き・花木】

1 アネモネ、ラナンキュラスの掘上げ

掘上げ適期は摘花のピークから40～50日後、葉が黄化し始めた頃です。若掘りは発芽率低下の要因となります。掘上げ後は、日陰で十分乾燥させた後、手でもみ込み、根と土を除きます。

また、乾燥機を使用する場合は、28～30℃で約40時間を基準とし、必ず一日に数回混ぜるようにします。

2 シキミ

(1) 炭そ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成され、激発するとほとんど落葉します。5～8月に発生が多くなります。発病した茎葉は早めに取り除いてください。

(2) シキミグンバイ

体長は4～5mm程度で、葉裏に寄生して吸汁加害します。被害葉は表面が白いカスリ状になる他、葉裏に糞や脱皮殻が付着し外観を損ねます。4～10月まで繁殖を繰り返し、再発もしやすいため、発生ほ場では初回防除から1週間～10日後の再防除が効果的です。

(3) フシダニ類

体長は0.15～0.2mm程度で、葉に寄生して吸汁加害します。被害葉にはモザイク状の輪紋が発生し外観を損ねる他、葉の黄化や奇形葉を誘発します。

(4) 防除薬剤

6月下旬～7月上旬に、定期防除として殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布してください。ミツバチの巣箱の近くや、茶園や他の作物が隣接して栽培されている場合は、農薬の飛散に十分注意してください。 <城戸>

【畜産】

梅雨を迎え、湿気と暑熱両面の対策が重要な時期になりました。今年の夏は暖かい空気に覆われやすく、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並みの見込みです。暑熱対策の基本は、人の熱中症対策と同じで、①環境温度を下げる、②脱水症状防止のための水分補給、③ごはん(エサ)を食べやすくする、の3つが重要なポイントです。暑熱対策は早めの対策をできることから実践していきましょう。

(畜舎内環境の管理)

換気扇の動作確認や消耗部品の点検を行い、夏場の故障を避けようしましょう。また、畜舎内に家畜糞尿を放置するとアンモニアなどのガスが発生し、その発酵熱で畜舎が熱くなり、人にも家畜にも悪い影響を与えます。畜舎内の除糞や換気をこまめに行いましょう。

(給水ニップル等配水の確認)

飲水量が不足すると、豚は食塩中毒(餌と給水のバランスを崩すことによる)、牛は水中毒(断水直後の多量給水による発症)を起こすことがあります。猛暑に入るとより多量の給水が必要になりますので、この時期から給水ニップルや給水カップの破損、詰まり等の点検をしてください。与える水は長時間溜めおかず、低温で新鮮な水の補給に努めましょう。

(飼槽の管理)

暑くなると食べ残した飼料は短期間のうちに変敗しやすいため、飼槽の四隅に古い配合飼料の残さがある場合は取り除き、少量を多数回に分けたり、涼しい時間帯に給与するなど、1日に必要な量の新鮮な餌を与えてください。

<平野>